

### 自由研究発表①-1

司会：中村 和世（ローレンシヤンインターナショナルスクール）

大塚先生からは、アクティブラーニングと IB に共通する課題と、現場実践にあたっての具体的な改善案をご提案いただきました。桑野先生からは、知の理論（TKO）の実践にあたり、「倫理」の教科書を使ったシラバスの設計と実践の振り返りを中心に、実際に授業をされてこられたお立場からのお話を、渡邊先生からは、日米仏の書く様式の差異などの具体例から各国の IB 導入の位置づけ、日本発 Localized IB のご提案をいただきました。森岡先生、田原先生、犬飼先生より TKO 実践のためのワークブック作成のお取り組み、山口様より、DP 履修者の視点をお話いただきました。参加人数は 40 名ほど。大変活気ある発表の場となりました。

### 自由研究発表①-2

司会：石田 勝紀（東京大学大学院）

本セッションでは、全体として発表者を含め 25 名ほどの参加者があった。全体を通して、参加者は全ての発表に対して非常に真剣かつ興味深く聞いていた。発表者は、非常に時間が限られた中での発表にも関わらず、端的にポイントがまとまったわかりやすい発表であった。第 1 の発表は中浦雄介氏による「国際バカロレア（IB）プログラムと批判的思考態度に関する研究」で、量的な分析と質的な分析によって「IB プログラムを受けている生徒は、批判的思考が高いのかどうかという視点での発表であった。次の眞砂和典氏、山口一裕氏による「岡山理科大学の IB 教員養成と Full DP ではない Course Candidate と CP の可能性」では、来年 4 月入学の学部生が 2 年次になったときから始まる IB 教員養成コースについての概要および、オハイオ州で開催された IB University Conference” についての発表があった。最後は来栖真梨枝氏、山本勝治氏、ダッタシャミ氏による「一条校における IBDP 歴史教授法」の発表であった。ここでは DO 歴史授業の設計と評価方法について発表された。

### 自由研究発表①-3

司会：勝俣 文子（加藤学園暁秀高等学校／玉川大学学術研究所）

本セッションでは、DP 及び MYP での国語に関する実践的な発表が行われた。参加者は 10 名余だったが、皆熱心に耳を傾けている様子で、質疑応答時には積極的な発言が挙がった。DP のスタートにあたり、中学 1 年次から段階的にエッセイ指導を行っている実践報告は、既に学校として独自の取り組みが定着している中、それを提示するに留まらず、更なる段階においての課題を指摘した。また、DP の 11 月試験に日本語 A：「言語と文学」が導入されることにより、その導入の可能性を丁寧に検証した発表は、授業主体が学習者であることを重視した上でその親和性を見極め、導入決定の経緯を明らかにした。MYP での単元「戦争を知る、戦争を語る」の実践発表は、戦争という大きなテーマに生徒が様々な視点から思考を深めていくことにより、体験していないことを実感する授業を展開したことを報告した。IB の国語科現場を始め、今後の国語科研究という分野においても有意義なセッションだった。

## 自由研究発表①-4

Chairperson : Mahmood Sabina (Okayama University)

There were 3 presentations in this session. The audience included mostly foreign participants.

The first presentation was a dual presentation by Carol Inugai (Tsukuba University) & Eliza Kumamoto (Yokohama International School). The speakers took turns in giving the presentation and talked about the various efforts of Yokohama International School to include and encourage diversity in IB students. The topics “Should only academically gifted students be IB educated and how IB students should be judged based on their diversity” drew a lot of attention.

The second presentation by Mike Bostwick (Kato Gakuen), shared a lot of valuable information about becoming an IB world school, from the experiences of the first authorized IB school in Japan. It cleared misconceptions of IB education being just an “add-on” to the existing Japanese education and the challenges ahead to bring about permanent transformations within a Japanese school, who are aiming to get IB recognition. It emphasized the need for students, teachers, parents and the whole system involved in the transformation to clearly understand that the IB education system is “and education for life”.

The third and final presentation by Corry Blades (IB Global Center), focused on the importance of research and the present system of curriculum design. It was a rare opportunity to get a detailed explanation of how the IB diploma program is organized and how important research is for the entire review process. The discussions in all three presentations were very well organized and the interactions and questions from the floor were very energetic and fruitful. The knowledge and experience of the presenters with respect to the IB system was vast and the audience appreciated the clear and concise answers that the presenters provided for each of the questions asked. Personally, I thoroughly enjoyed moderating the session and learned a lot from each presentation.

## 自由研究発表②-1

司会：渡邊 雅子（名古屋大学）

小野永貴氏（筑波大学大学院図書館情報メディア研究科）は「国際バカロレアと図書館」という題目で、DP と日本の図書館の設置基準をシステムティックに比較し、後者が資料の収集・整理・保存によって児童・生徒・教員の利用に供する事を設置根拠としているのに対して、DP では、生徒の自主的かつ自由な図書館利用が行えるかを重視し、学習スペースや利用時間、人的リソースにまで言及していること、またオンライン・ジャーナル講読までが基準対象になっていることを明らかにした。山崎喜朗氏（日本私学教育研究所）は「IB 教育と私学、他言語」という題目で、私学がいかに IB 導入の牽引を行ってきたのかを体験を交えて発表され、私立学校は他の学校の訪問・見学を通して IB を把握し、それにより教授法を通した IB の深い意図を探ってきたことが明らかにされた。勝俣文子氏（加藤学園暁秀高等学校）は、「国際バカロレア教育における日本人意識育成についての一考察」という題目

で、生徒の日本人意識が日本文化論や文学作品鑑賞により時代背景や価値観を現代と比較したり世界文学と比較したりすることによって育まれたこと、さらには英語で行っている歴史や英語の授業で、欧米の視点を通して歴史や日本文化を学ぶ事により「外から見た日本」を意識できたことをアンケートから明らかにし、使用言語に関わらない日本人意識の育成という興味深い知見を提供した。いずれの発表においても各発表者の専門領域ならではの新しい知見が提供され、質疑応答も熱のこもったセッションとなった。

## 自由研究発表②-2

司会：森岡 明美（岡山大学）

本セッションでは、多様性に富む発表が行われた。堀谷有史氏は、政府のグローバル化政策と企業が与える大学への圧力、ひいては IB 教育への影響の懸念を表明し、真のグローバル化を再考する必要性を訴えた。インクルーシブ IB モデル校創生支援市民の会の松井理絵氏、朝見有実氏、小原美良氏は、IB 教育の理念を基盤として行っている、家族や地域を巻き込んだ包摂的な教育の試みについて報告した。御手洗明佳氏は、IB の学習者像を分析し、学習者像は教育目標であると同時に、学習成果として評価可能な目標であるとの認識を示した。井上志音氏は、TOK の手法を活用し、学習者の「問い立て」を主軸とした「教科外横断」「教科内横断」型の国語科探求学習を中学で実践し、探求学習の核となる「問い立て」の力をいかに育むことができるのかの実践成果を報告した。4 件の発表は、子どもから大学生や大人までの学びに IB 教育の理念と実践がどのように生かせるのか、また同時にどのような課題があるのか、それぞれ違う視点から切り込んだ多角的な発表の組み合わせとなった。

## 自由研究発表②-3

司会：永留 聡（英数学館中・高等学校）

参加人数 34 名

①国際バカロレアの示す「インクルーシブ」についての一考察 中川 由貴（玉川大学大学院）

インクルーシブとは何か。多様なニーズを持つすべての子どもを対象にした教育で IB の枠組みとどのような方法で実現されるか話し合いが実施された。

②MYP における「学際的な学習」に向けた予備的实践と考察 河野 あかね（つくばインターナショナル）

「学際的な学習」において本来重視されるべき概念について議論が交わされた。国語と体育の学際的な融合の事例紹介があった。

③国際バカロレア（IB）がめざす理念を取り入れた社会科学習のあり方 秋山 寿彦（東京学芸大学付属世田谷中学校）

IB がめざす理念＝「ホリスティックな教育」に対する受け止め方についてや、IBDP は海外進学に有利なだけのプログラムではないなど活発な議論が展開された。

## 自由研究発表②-4

Chairperson : Douglas Trelfa (University of West Florida)

Shinichiro Takamatsu of Gunma Kokusai Academy Secondary School presented feedback and reflections regarding an online professional development workshop for teachers. The online modality workshop allowed for a diverse group to participate. The cost was \$600 per participant. 4 modules were covered, one per week, with 12 to 15 assignments per module.

Yuya Akatsuka of Waseda University Hongo Senior High School presented on the effectiveness of pedagogical approaches in English language education. Akatsuka mentioned that other skills such as critical thinking, differentiation, and interactive skills can be taught through English language education. He provided examples of such integration. Japanese schools tend to focus on lower order thinking skills, which is also reflected in the English teaching in Japan.

Curtis Beaverford of the University of Tsukuba presented on various approaches to learning across IB programs. He focused on importance of involving IB classroom teachers in the development of the curriculum as was done in Australia.

We allowed for questions and comments after each presentation. Although I did not record the questions, the time for questions was quite limited after each presentation, with two or three questions/comments after each presentation.

Approximately 30 people attended this session.

## 自由研究発表③-1

司会：田原 誠（岡山大学）

江幡知佳（筑波大学大学院）は、「米国における国際バカロレア中等教育プログラム導入過程の研究—「包摂性(Inclusiveness)」を中心に—」において、11～16歳を対象とする国際バカロレア(IB)の中等教育プログラム（Middle Years Programme）について、その理念と、教育の特徴を歴史的背景を踏まえて説明し、それが、米国において広く受け入れられた様相を示した。

国境を越えて提供されるIB教育は、受け入れ国において、その資格認証と能力評価をどのように策定するかが喫緊の課題である。花井渉（九州大学）は、「国際バカロレア導入に伴う資格認証制度に関する研究—質保証に焦点を当てて—」において、イギリスにおける大学・カレッジ入学サービス機構（UCAS）のUCASタリフ（UCAS Tariff）や資格試験統制局（Ofqual）においてIBがどのように認証されているかについて論じた。

石井克佳（筑波大学附属坂戸高等学校）は、「本校における国際バカロレア日本語DP導入に向けての取り組み」において、筑波大学の国際化プロジェクトや大学院教育研究科での国際教育修士プログラムの関係から、同校におけるこれまでの教育の国際化の歴史と同校での日本語ディプロマプログラム開設への取り組みについて説明した。

### 自由研究発表③-2

司会：上岡 学（武蔵野大学）

「1. 普通科高校における探究学習を取り入れた英語実践と教育実習：安田明弘（早稲田大学大学院）」では、3 週間の教育実習において実施した探究学習を取り入れた英語授業の実践報告と国際バカロレアの教育手法に関する理解が実習を通してどのように変化したかの研究について発表された。国際バカロレアの教育手法を参考に授業を構成した結果、「問い立てする力」「学習手法を選びとる力」が重要であることが明らかにされた。

「2. 国際バカロレアにおける芸術教育の在り方とその評価について ～美術に着目して～：櫻内美沙（玉川大学大学院教育学研究科 IB 研究コース修士課程 2 年）」は、国際バカロレアの美術における評価の在り方についての研究発表であった。MYP の ARTS では、創造的思考プロセスが重視されており、さらに評価規準が詳細に決められていることが指摘され、国際バカロレアの美術担当教員へのインタビュー調査を行い、創造的プロセスの重要性が明らかにされた。

「3. 国際スタンダードを想定した新科目の実践報告：金井大貴（茨城県立土浦第一高等学校）」は、「国際的に活躍できるグローバル・リーダー」の育成に取り組む学校ではどのような力を育成しているのかについての分析研究である。その結果、課題解決能力やコミュニケーション能力など国際バカロレアで重視している能力と共通していることが明らかにされた。

### 自由研究発表③-3

司会：鈴木 克義（常葉大学）

このセッションではまず 2 人の玉川大学院生が、従来型の教育で育った IB 教員と、教職課程で学ぶ学生の意識が変容するプロセスについてインタビュー調査し、その結果について発表を行った。3 人目の筑波大院生の発表は MYP 音楽授業の事例研究で、科目横断型の IB 授業について具体的な手法が示されており、会場を巻き込んだディスカッションに繋がった。

### 自由研究発表③-4

Chairperson：Thomas Fast（Okayama University）

1. International Baccalaureate Diploma Programme implementation experiences in three Canadian Public High Schools by Kaori Kikuchi and Curtis Beaverford (University of Tsukuba)

The presenters shared their discoveries after researching and visiting International Baccalaureate Diploma programs in public schools in North America. Specifically, the presenters visited three high schools in Edmonton, Alberta Canada. They determined that the Canadian public schools might serve as implementation models for IB DP programs in Japan, especially Article 1 schools. The reasoning is that public institutions in both countries have to comply with highly structured graduate requirements as mandated by their local governments, in addition to the requirements for the IB Diploma.

Also, they must operate their IB programs with no financial aid from their national ministries of education.

They recommended that more schools in Japan might want to consider the option of granting credit for IB courses (formerly known as IB subject certificates), for students unable to pursue a full Diploma. This seems to be quite common in North America, where the Advanced Placement system has laid the foundation for universities to grant credit students for fulfillment of AP and IB courses. Meanwhile in Japan, it seems students are still only able to pursue the full Diploma or drop the IB altogether in order to fulfill the rigorous MEXT graduation requirements. Allowing students to receive credit for IB courses might grant more students access to the IB overall.

In addition, the presenters cautioned administrators who might be planning to open IB to a small cohort within their schools. It is often assumed that by creating these small IB programs within schools, the benefits of the IB will trickle down to other students. According to the presenters, this rarely happens. Instead it seems to create a polarization within the school between the IB and non-IB staff and students.

The overall message of the presentation was that it could be highly beneficial for Japanese public schools to develop relationships with North American public schools, whose experience with the IB has given them the answers that Japanese administrators seek to implement the IB in their own institutions.

## 2. The Advancement of IB in Japan by Clare Grady (Hyogo University of Teacher Education)

The presenter provided a brief history of the International Baccalaureate from its founding in 1968, to the more recent history of the IB's promotion and growth in Japan, and the 2012 announcement by MEXT to dramatically increase the number of IB schools by 2018. Changes since 2012 have included the adoption of Japanese as an official IB language. This has resulted in greater possibilities for MEXT to reach its goal of increasing IB schools, which has now been pushed to two hundred schools by 2020.

In addition, she described the Global Education Teacher training program at her university, which while not an IB certification program, shares similarities with the IB. Ms. Grady noted that she is also a graduate of an American IB high school in Florida.

## 3. How IB is unfolding in Australia at the school, university and professional training levels by George Manetakis (Australian Embassy Tokyo)

Mr. Manetakis, a representative of the Australian Embassy in Tokyo, talked of the IB's advancement in Australia, noting that it has largely been a "bottom up" movement, where the IB has been promoted by teachers, parents and members of the community. In contrast, the IB movement in Japan has been more of a "top down" promotion by

MEXT. Both countries have also seen a growth in IB Education Certification (IBEC) programs at the university level. Universities in Australia, such as Flinders University and the University of Melbourne, have IBEC programs that are already quite established. Meanwhile IBEC programs in Japan are just beginning to appear, and Australian universities are receiving a large number of inquiries and requests from Japan regarding IBEC program development. Mr. Manetakis explained that for interested Japanese universities, the Australian Embassy in Tokyo can serve as a liaison between Japanese and Australian institutions, and perhaps facilitate better relationships between university programs in both countries.

#### 4. International Baccalaureate Diploma Graduates at Okayama University by Mahmood Sabina (Okayama University Admission Center)

Ms. Mahmood described the situation of IB graduates at Okayama University, which currently has the largest number of former IB students in Japan. IB students enjoy a good deal of freedom at Okayama University and are allowed to opt out of certain courses. She described the various channels of support that are offered to the students, including regular interviews that are conducted by Ms. Mahmood, as well as both virtual and real support groups that the students have created for each other, using LINE and meeting on campus. Currently all of Okayama University's IB students are Japanese nationals who have graduated from either IB schools in Japan or abroad. The two groups of students are rather different in how they wish to be perceived. IB graduates of overseas schools generally have no problem being associated with the IB, however graduates of IB schools in Japan seem to be uncomfortable being labeled "IB students." Compared to their returnee counterparts, they are less likely to ask questions or give opinions in class and would prefer not to stand out. IB graduates of overseas high schools seem to be quite comfortable with how they are perceived. In general however, both groups seem to be doing well at Okayama University.

